

# 第72回 「昭和歌謡のモーツァルト」 楽曲だけでは語り尽くせない

作曲家・筒美京平の初期経歴を追ってみると、いしだあゆみの『ブルー・ライト・ヨコハマ』で昭和44年末のレコード大賞作曲賞を受賞する以前は、ヴィレッジ・シンガーズ、ジャガーズ、オックス、渋いところで宇崎竜童がマネジャーをしていたこともあるガリバーズや富永一朗が後援会長だったヤングガーズなど、主に人気GSへの提供作曲家として名が知られ、タイガース人気を支え、かつて筒美が指導を受けた作曲家・すぎやまこういちと、時を置かず肩を並べることになります。

昭和46年に尾崎紀世彦に提供した『また逢う日まで』でトップ・コンポーザー（作・編曲）として押しも押されぬ存在となるまでの間は、奥村チヨや弘田三枝子らの女性歌手にも曲を提供していましたが、ブレイクのきっかけとなったいしだあゆみには、GSを支えた作詞家・橋本淳となかにし礼とのコンビで佳曲を提供し続けました。

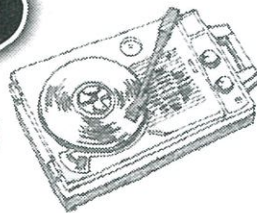
その中で私が興味深く感じている

1曲は、昭和45年10月に発売されたシングル盤『何があなたをそうさせた』（詞・なかにし礼）です。まるで

## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎  
絵・松本 浦



西田佐知子が歌っているような倦怠感と退廃ムードを醸し出しているいしだの歌唱が特徴的です。失恋ソングですが、なかにしは3番の歌詞の中に「死」の文字を入れて虚無感を増幅させ、いしだの細かい声で歌われるといっそう失恋女性の哀れさが胸に迫ってきます。

作曲した筒美は、その前年の昭和44年、西田佐知子に『くれないホテル』（詞・橋本淳）を提供、西田がかつて発散させていた倦怠感を再現させています。西田のヒット曲『アカシアの雨がやむとき』や『エリカの花散るとき』『東京ブルース』（3曲とも、詞・水木かおる）の歌詞に含まれる「死」の文字が、西田の澄んだ

高音をいっそう昇華させていることに気づいていたのか、声を楽器の一部ととらえることのあった筒美は、西田と同質の声と歌唱法を持ついしだに、『何があなたをそうさせた』であえて西田を意識させて歌わせたかったのかもしれない。

西田の『くれないホテル』は4分の3拍子の曲でありながら、細部にこだわる筒美の美学によって、類型的な3拍子ソングではなく、上質な歌謡ポップスとして仕上がっています。特にエンディングでは「くれないホテル／＼」と2小節で終了するのが通例のところ、筒美は複雑なコードを使いつつ「くれない／＼／＼／＼」と1小節増やした変則小節数で構成、『何があなたを』で使用した変拍子を思い

出させます。

西田もいしだも所属レコード会社は別ですが、歌の作り手の専属制が瓦解したことで、こうした楽しみ方もできるようになりました。

「昭和歌謡のモーツァルト」と私が思っている筒美京平の功績は、楽曲だけに限定されるような小さなものではありません。